

氏名	スギハラ アケミ 杉原 朱美
学位の種類	博士（文化財）
学位記番号	博美第382号
学位授与年月日	平成24年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉国沢新九郎の油画技法に関する研究－我が国の油画黎明期に果たした役割－

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	教授	(美術学部)	木島隆康
(副査)	〃	〃	(〃)	桐野文良
(〃)	〃	〃	(〃)	佐藤一郎
(〃)	〃	名誉教授		歌田真介

(論文内容の要旨)

1. 研究目的

本論文は国沢新九郎が油画作品に用いた技法の研究である。

国沢新九郎とは明治初期にイギリスに留学し、日本へ油画を導入、普及させた人物である。

国沢は弘化4年(1847)、高知に生まれ、青年期は軍人として過ごした。明治3年(1870)、23歳のときに軍人時代の功績により藩の留学生に選ばれ、法律修学を課されイギリスに渡った。このイギリス滞在中に画業へと転向した。明治7年(1874)、政府から帰国命令を受け帰国する。この当時の日本の画家は国内に持ち込まれた洋書の挿絵や油画から構図を学んだり、油画に嗜みのあった外国人に描き方を教わったりと、油画技法習得に暗中模索していた。その中において国沢は、外国人画家に直接油画を学んだ最も早い日本人である。帰国後まもなく、国沢は上京し画塾「彰技堂」を開設し、精力的に展示会を開催した。だが国沢はイギリス滞在中に発症した病気により、帰国わずか3年後の明治10年(1877)に亡くなる。

昭和20年(1945)5月の東京大空襲の際には、国沢作品の多くが焼失し、伝承を含め9点のみが現存する。このような背景を持つ国沢は、我が国では画家としてより、むしろ教育者として認識されている。国沢の不遇な点は、短命や作品の焼失の他に、国沢が帰国してわずか1年後に工部美術学校が開設され、本格的な油画を学ぶ主要な場が移行した点にもある。工部美術学校の影響下に、国沢のもたらした技法は注目されなくなったのである。

本研究は、国沢の技法的特徴を解明することにより、画家としての新たな位置付けを提議し、これまでよく理解できなかった国沢が我が国にもたらした油画技法の実態を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

国沢がイギリスで師事した画家は、ジョン・エドガー・ウィリアムズ(John Edger WILLIAMS、1821年-不明)であると、ほぼ確定することができた。この画家の発見が、本研究に大きな弾みをつけた。

研究方法は、ウィリアムズや本多といった国沢の門人、高橋由一やチャールズ・ワーグマンなどの同時代の画家の作品調査を行い、国沢作品と技法を比較する。研究対象とした作品は人物画に絞った。国沢とウィリアムズを比較することによって、国沢が学んだ技法が明確になると考えた。同時代の画家との比較は、国沢の独自性が分かり、門人との比較により国沢がもたらした技法の解明に至ると考えた。

加えて、坂広による『油画導志留辺』や、本多錦吉郎による『画学類纂』、藤雅三による「フォンタネージ講義」なども、技法を考察する資料として調査の対象とした。

3. 研究内容・結果

国沢とウィリアムズに見る共通点を3つ挙げる。1番目は、背景には赤褐色の有色の下塗りを施し、顔部には施さないといった、色調に応じて有色の下塗りを施す箇所と施さない箇所がある点である。対してチャールズ・ワーグマンの《自画像》には下塗り自体の確認ができない。一方、アントニオ・フォンタネージの《牧牛》は画面全体に褐色の下塗りを施している。本多作品においては、褐色の下塗りを確認できる。

2番目は明部と暗部の描き方である。ウィリアムズと国沢は明部には絵具を厚く塗り、暗部は絵具を薄く塗っている。加えて、光にも直射光と反射光があることを捉えており、物体の形態が投影された影(以下影)と、光が当たらない部分の陰(以下陰)という意識が窺え、それぞれ明確に描き分けられている。同時代の画家にも明部が厚く、暗部が薄いという規則性は見られるが、ワーグマンの《自画像》では、明部と暗部ともに厚く塗り、《少女》は地塗りの白色を活かすため明部の絵具が薄塗りされている。また高橋由一の《司馬江漢》は、暗部も明部と同色の絵具を用い、暗部を薄層にし、下素描の際に施した陰影の暗色を活かしている。これら3作品には影と陰の明確な描き分けは見られない。反射光は描かれるものの、直射光との明確な描き分けはできておらず、それらは区別されていないと考えられる。しかし、国沢没後の門人の大平広正においては、明部は厚く、暗部は薄く絵具を塗り、その上、反射光や影と陰の明確な描き分けが見られ、伝承が見て取れる。

3番目は筆触である。国沢とウィリアムズは筆触を使い分け、描かれる対象物の材質感を表現している。しかし同時代の画家は、図柄の輪郭線にとらわれていて、材質感がない。後の原田直次郎の《靴屋の阿爺》では、輪郭に沿うこともなく、自在な筆触により描かれている。本多、大平などの門人においても、国沢と同様に筆触が整理され、材質感が描き分けられている。

ウィリアムズの作品を調査することによって、ウィリアムズと国沢の技法を比較することができた。その結果、これまで不明であった国沢が持ち帰った技法を明確にすることが可能となった。

人物画に絞ったが、国沢の技法は以上の3つの特徴を有する独自の技法であることが分かった。また門人の作品との比較により、国沢は学んで来た技法を漏らすことなく我が国にもたらしていたことが明らかとなった。さらに明部と暗部の描き分けや筆触による材質感の表現にとどまらず、光と影の捉え方も伝承されていたことから、国沢は油絵具の特性を習得しただけではなく、画家に必要な自然現象の理解と、それに対する見方、反応も会得していたことが窺えた。そして国沢が理解し、習得していたからこそ、工部美術学校の影響があった後までも、国沢が用いた独特な技法の門人への伝承が可能であったと結論付けることができる。

(博士論文審査結果の要旨)

本申請論文はわが国の油画黎明期に活躍した国沢新九郎を取り上げ、欧州から持ち帰った西洋文化の一つの油画技法がわが国の油画界へもたらした影響を、文献調査や聞き取り調査、作品調査を通して明らかにした成果をまとめたものである。本論文は序と総括を除き5章よりなる。国沢は短命であり、現存する作品も極めて少なくその一部は戦災や火災で失われていることからあまり注目されていない。しかし、申請者は国沢が油画の導入・定着に大きく寄与した点に着目し、それを明らかにすることを目的としている。そのために、まず、国沢の作品調査を技法面と自然科学的調査の両面から推進し、その油画の技法的特徴を明らかにした。これと併行して国沢がイギリス留学中に油画を学んだ師の特定を行い、国沢の師がウィリアムズであることを調査から見出した。これは、これまで明らかにされていなかった

点であり、国沢がわが国の油画黎明期に果たした役割を知る上で大きな成果である。そして、ウィリアムズの作品調査の結果と国沢の作品における調査のこの成果である技法調査結果とを比較することにより国沢がイギリスで学んだ技法を明らかにしている。これは、わが国の明治初期における油彩画の歴史を知る大きな成果であると評価できる。また、国沢は欧州より日本で油画の教育を行うことを意識して画材や教科書などを持ち帰っていることも調査から明らかになり、国沢の油画に対する姿勢を明らかにした。また、国沢の門人や同世代の油画家の作品調査から国沢がもたらした影響を油画技法の観点から明らかにしている。その調査手法も文書や作品などを中心にした確固たる資料を用いており、得られた成果の信頼性は極めて高い。国沢新九郎を多角的に研究したのは本論文が初めてであり、油画技法史および保存修復の面からもその成果は大きい。

以上のことから、本申請論文は博士（文化財）の学位を授与するのに十分な内容および水準であると判断できる。

以上